

# 万葉集・三代集における危惧表現をめぐって

—「モゾ」「モコソ」を基点として—

近藤 明

Expressions of Anxiety in Manyōshū and Sandaishū

Akira KONDOH

## 一 はじめに

複合助詞「モゾ」「モコソ」が危惧の意を表すことは、江戸時代から次のように指摘されている。

行末をかねておしはかりてあやぶむ意のてにをは也

(本居宣長『詞の玉緒』)

下に「うに」又「ばわろいに」とつけて心得べし

(富士谷成章『あゆひ抄』)

一方この「モゾ」「モコソ」については「使用の制約が多い形式である」「用例数はさほど多くないと言える」という指摘がある(高山善行(一九九六))。また上代には危惧の意を表す「モゾ」「モコソ」は未確立であったようでもあり、古語において危惧表現に与る形式がこれだけであったとも考えにくい。

危惧表現の歴史といったことを明らかにしようとした場合、

○危惧の意を表す形式は「モゾ」「モコソ」だけであったのか、それ以外に危惧の意を表す形式があったのか。

○あったのであればそれはどのような形式であるか。

等についての見通しを得る必要があり、その上でそれらがどのような歴史的消長をしてきたのかといったことを解明する段階に進むことが可能になると思われるが、管見の限りでは従来右の点に関する本格的な論はない。本稿は近藤明(二〇一三)に続いて、この点についての見通しを得ようとする試みの一つである。

なお本稿では「危惧表現」を、「つごうの悪い事態が将来起こることを予測し、『そうなるといけない(困る)』というような気持ちを表す」(松尾聰(一九八四))、「将来のことについてよくない事態を想定し、そのことが気にかかって不安に思うということを表す」(小池清治(二〇〇二))等をふまえ

望ましくない事態が起きる可能性があると判断し、それを危ぶむ気持ちを表す表現

という程度に捉えておく。

ちなみに現代語で危惧表現に関与する形式としては、「カネナイ」「オソレガアル」「テハイケナイ」「トイケナイ」「カモシレナイ」等が挙げられよう。このうち「カネナイ」「オソレガアル」「トイケナイ」はほぼ危惧表現専用であるが、「

テハイケナイ」は多義的であるし(日本語記述文法研究会(二〇〇三) 高梨信乃(二〇一〇)等)、「カモシレナイ」はそれ自体では「可能性」程度の意味を表し(森山卓郎(二〇〇二)等)、「危惧」の意に限定されるには「ワルクスルト」等の副詞類との組み合わせが必要になりそうである<sup>(2)</sup>。

## 二 前稿の方法・成果と課題

### 「方法・成果」

前節で述べた問題を論じるに当り、単に、古語において危惧の意を表すと思われる表現を思いつくままに挙げるという方法では限度があると思われるため、前稿の近藤明(二〇一三)では、右の「モノ」「モコソ」を言わば基点として探っていくこととの発想から、次のような手順をとった。

I 確実に危惧の意と解される「モノ」「モコソ」において、危惧されている事態(以下「被危惧事態」)を表す語句に注目する。例えば「(句宮↓中の君)むげに隔て多からむは罪もこそ得れ」(源氏物語 早蕨 一六九四①)という例であれば、「罪・得」に注目する。

II その上で、「罪・得」の他の用例を調べて、その事態を危惧的に述べる場合にどのような形式が共起しているかをチェックする。例えば「横川僧都の思惟・浮舟に薫を会わせるのは」とほしく罪得ぬべきわざにもあるかな(同 夢浮橋 二〇六〇③)という例があれば、「ぬべし」をピックアップする<sup>(3)</sup>。ただし推量系助動詞が単独で用いられている場合は、参考程度にとどめる<sup>(4)</sup>。

右の手順を、中古の和文資料の源氏物語を対象に行った結果、Iの手順においては、「モノ」「モコソ」による被危惧事態を表す語

句で2例以上の用例が見られるものとして、「罪・得」(あらはなり)【あるまじき】【とちめ】【ほだし】【見とがむ】(「見奉り」とがむ)を含む)【(手紙等が)落ち散る】が挙げられた<sup>(5)</sup>。

続いてIIの手順で、それらと共起する危惧表現形式の候補として次のようなものがピックアップされた。

○前掲の「ヌベシ」や、「横川僧都↓薫」なにがしこのしるべにて必ずつみえ侍なん」(夢浮橋 二〇六〇⑩)、「人のみとがめつべければ、御念誦堂にこもりゐ給ひて、日一日泣きくらし給ふ」(薄雲 六一八④)といった「ナム」「ツベシ」等の複合助動詞系の形式。

○「大君、薫を手引きすることを中の君にけしきだに知らせ給はずは、罪もやえむと身をつみていとほしければ」(総角 一六〇二⑩)のような「モヤーム」、「なかなかおぼえな」見とがむる人やあらんと思すなりけり」(宿木 一七四九⑧)のような「ヤーム・ラム」等の疑問推量系の形式<sup>(6)</sup>。

なお近藤明(二〇一三)では、右の手順による作業を、あえて単一の資料の中で行うこととし、資料を原則として源氏物語に限定したが<sup>(7)</sup>、中古和文の複数資料にわたって横断検索的なことをした場合<sup>(8)</sup>、「ひきあひてはあしからん。いとくものせよ」(蜻蛉日記 下 天録三年二月 二六六⑥)、「人けしき見はべりなば、なかなかいとあしかりなん」(源氏 浮舟 一九二〇⑧)のような「仮定条件表現+評価語」という形の評価的複合形式と言えそうなものが追加されそうである。

### 「課題」

前述の方法で若干の見通し・成果が得られた部分はあるものの、なお次のように多くの課題が残る。

(一) 前述のような中古和文の複数資料にわたる横断検索的なこと

を本格的にした場合、どのような結果が得られるか。

(二) 中古において文体の異なる他の資料(和歌や訓点資料)、あるいは上代・中世といった異なる時代の資料においてはどうか(ただし上代には危惧の意の「モノ」「モコソ」が未成立と見られるし、訓点資料では係り結びの使用そのものが稀であるため、「モノ」「モコソ」を基点とした前述の方法をそのままでは適用できない)。

(三) ピックアップされた形式の各論的検討。複合助動詞系、疑問推量系の形式としてピックアップされたものは、いずれも危惧専用の形式とは思われない。本来は単なる可能性表現や疑問推量であるものが文脈によって危惧・懸念の意をも表すという程度のものなのか、ある程度危惧・懸念への親近性を有するものなのか等の検証が必要。

四 危惧表現の定義、可能表現等との関連や「評価のモダリティ」等と言われるものの中での位置づけ。

これらの諸課題の中から、本稿では(二)の点、特に上代の万葉集と中古の和歌においてどのような形式が危惧表現に与っていたかを、以下検討していくことにする<sup>9)</sup>。

### 三 万葉集と三代集

#### 三・1 万葉集

##### 「方法・手順」

前節で挙げた課題のうち、上代はどうかという点は興味深くかつ重要な問題ではあるが、高山善行(一九九六)が、「上代においては確かな例が見つかっていない」としているように、上代には「モノ」「モコソ」による危惧表現が未発達だったようである。万葉集をはじめとした上代資料においては「モコソ」の用例

はなく、「モノ(モノ)」は万葉集に8例あるものの、危惧の意に解される確実な例とまで言えるものはない。可能性があるのは

恋にもそ(毛曾)人は死にする水無瀬川下ゆ我瘦す月に日に異に (巻四 五九八 笠女郎)

の一例だけである。松尾聰(一九八四)のようにこれを危惧の意とする意見もあるが、同じ「死にす」でも

かうしつしにもこそすれ。(中略) かくて果てなばいとくちをしかるべし。

(蜻蛉日記 中 安和元年閏五月 一七七<sup>10)</sup>)

のような例と比べると一般論の域にとどまるようである<sup>10)</sup>。

このように危惧の意を表す「モノ」「モコソ」の確例が無いということになる、万葉集等の上代資料では、同一資料内・あるいは同時代の資料内で、前述のⅠ・Ⅱの手順をとることができない。そこで、

Ⅰ 被危惧事態を表す語句を、時代・文体の近い、中古の古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集の三代集の歌にまで範囲を広げてピックアップする。

Ⅱ その上で、万葉集においてそれらの語句の表す事態を危惧的に述べる場合、どのような形式が用いられているかをチェックする。

という手順をとることにする。

#### 「Ⅰ 被危惧事態を表す語句」

三代集で「モノ」「モコソ」による被危惧事態を表す語として複数の用例が見られたのは、

① 桜花今日よく見てむ呉竹の一夜のほどに散りもこそすれ

(後撰和歌集 卷二春中 五四 坂上是則) のような【散る・散りす】(他に拾遺集二〇一に「モコソ」の例)

と、

② いな折らじ露に袂の濡れたらば物思ひけりと人もこそ見え

(拾遺和歌集 卷九雜下 五三一 寿玄法師)

のような「人・見る」(他に拾遺集三六〇に「モコソ」の例)である。ただしこれらの「人・見る」の「見る」は、単なる視覚的な意味というより、「秘めておきたいことを認識・理解する」といった意味であり、

③ 花見れば心さへにぞうつりける色には出でじ人もこそ知れ

(古今和歌集 卷二春下 一〇四 躬恒)

のような「人・知る」にも近いところがある。そこで被危惧事態を表す語句として「人・見る」だけでなく、「人・知る」も併せて調査の対象とすることにした。

被危惧事態を表す語句が「散る・散りす」と「人・見る・知る」だけでは少ないようであるが、前者は自然現象、後者は人間の行為という点では、それなりにバランスがとれてはいるし、いずれも万葉集でもたびたび話題になりそうな事態でもある。

## Ⅱ Iとの共起が認められる形式

Iのことをふまえ、万葉集において「散る」「人・見る・知る」と共起する形式をチェックしてみる。なお「散る」には「散り過ぐ」「散りゆく」の例も含めることにする。

### 【散る】

散るべき時が来る前に散ってしまったり、心ゆくまで鑑賞しないうちに散ることを予測し、そうならないように・そうなる前にくしようとするものを、危惧の念を伴う例とし、単に季節の推移によって散りそうだという程度のもの(四二五九)は、危惧の念を伴う例には含めないこととする。

### 「ヌベシ」

④ ほととぎす鳴く羽触れにも散りぬべみ(落奴倍美)袖にこき入  
れつ藤波の花 (卷十九 四一九三 一云)

⑤ 秋萩を散り過ぎぬべみ(落過沼蛇)手折り持ち見れどもさぶし  
君にしあらねば (卷十 二二九〇)

他に「散りぬべし」が1例(七九八)認められる。「ヌベシ」は、前述のように源氏物語でもピックアップされたものであった。

### 「カナムラム」

#### 「ムカモ」

⑥ 大君の三笠の山のもみち葉は今日のしぐれに散りか過ぎな  
む(散香過奈牟) (卷八 一五五四)

⑦ わが屋外の花橘はいたづらに散りか過ぎらむ(知利可須具良  
牟)見る人なしに (卷十五 三七七九 中臣宅守)

⑧ あしひきの山のみ照らす桜花この春雨に散りゆかむかも(散  
去鴨) (卷八 一八六四)

疑問推量系の形式として⑥のような「散りか過ぎなむ」(他に3例)、⑦のような「散りか過ぎらむ」、⑧のような「散りゆかむかも」の例が認められる。「危惧」か単に季節の推移によって散りそうだという「愛惜」程度かの判断が微妙なものも多いが、疑問推量系表現は前述のように源氏物語でもピックアップされたし、「ムカモ」には次の「人・見る・知る」と共起した例も認められる。

### 「仮定バ+惜シ」

⑨ 手折らずて散りなば惜し(落者惜)とあが思ひし秋の黄葉を  
かざしつるかも (卷八 橘奈良麻呂 一五八一)

⑩ 白露に争ひかねて咲ける萩散らば惜しけむ(散惜兼)雨な降り  
そね (卷十一 二二一六)

「惜し」という心情形容詞による評価は、「危惧」というよりは「愛惜」程度と称する方が適切とも思われるが、他にも「雪が」

消なば惜し」(二九九・一六四六)、「名立たば惜しみ」(七三一・二六九七)等がある。一方、前掲の「人けしき見はべりなほ、なかなかいとあしかりなん」(源氏 浮舟)のような「あし」や「わろし」を含む評価の複合形式風の表現は万葉集には見られないように、「惜し」を含むものの幾つかは、この時代の評価の複合形式風の危惧表現形式として位置づけられることが検討されてもいいかもしれない。

これに類似するものとして

⑪春雨はいたくな降りそ桜花いまだ見なくに散らまく惜しも

(散卷惜裳)

(巻十 一八七〇)

のような「散らまく惜し」があり(他に19例)、「マク惜シ」の「マク」にある程度仮定性が認められるとすれば「マク惜シ」の現+評価語「惜シ」という点で類似の形式ということになるが、こちらにも「危惧」か「愛惜」程度かの判断が微妙な例が少なくない(11)。

【人・見る・知る】

「ヌベシ」

⑫色に出でて恋ひば人見て知りぬべし(人<sub>心</sub>知)心のうちの隠り妻はも

(巻十一 二五六六)

⑬君が名言はば色に出でて人知りぬべみ(人<sub>心</sub>知)あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて君待つ我を

(巻十三 三二七六)

他に4例(二〇七・一三八三・一七八七・二三八七)。いずれも「ベシ」の部分の表記は「可」また「応」で、「ヌ」の部分は補説が認められ、いずれも秘めた心や行為を他人が知ることを好ましくないといえ、そうならないよう心の中にとどめたり(⑫)、別の理由をつけて相手待つ(⑬)等の対処をしている<sup>12)</sup>。

一方、単独の「ベシ」が【人・知る】に下接した例もあるが、「大伴の遠つ神祖の奥つ城は著く標立て人の知るべく(之流備久)(巻十八 四〇九六)のように、危惧を伴わない例もある。もつとも「ヌベシ」にしても、【散る】の場合は先に述べたように危惧の念を伴わない例もあり、「ヌベシ」自体が危惧表現専用というわけではないのだが、「ベシ」単独の場合に比べて「ヌベシ」が「危惧」の意への親近性を持つといったことが言えるか否か、検証を要するところであろう。

「ムカモ」

⑭うかねらふ跡見山雪のいちしろく恋ひば妹が名人知らむかも(人<sub>心</sub>知可聞)

(巻十 二三四六)

「ムカモ」は疑問推量系と位置づけられ、【人・知る】と共起するのは右の1例だけであるが、【散る】とも共起が認められた形式である。

他に「将来のこと」ではなく、恋の露見といった好ましくない事態が(自身では確認できていないが)既に起きたのではないかと案じている中で用いられている形式として「ケムカモ」(4例)「テムカモ」「ツラムカ」があり、関連するものとして併せて掲げておく。

⑮月しあれば明くらむわきも知らずして寝て我が来しを人見けむかも(人<sub>心</sub>見兼鴨)

(巻十一 二六六五)

⑯長谷の弓月が下に隠したる妻あかねさし照れる月夜に人見てむかも(人<sub>心</sub>見点鴨) 一に云ふ「人見見つらむか(人<sub>心</sub>見豆良牟可)

(巻十一 二三五三)

「マクニ」

⑰絶えずゆく明日香の川の淀めらば故しもあるごと人の見まくに(人<sub>心</sub>見国)

(巻七 一三七九)

「マクニ」は近藤明(二〇一三)ではピックアップされなかった

タイプの形式であるし、危惧表現専用とも考えにくい。ただ「推量系助動詞＋助詞ニ」と捉えれば、『あゆひ抄』で「下に「うに」又「ばわろいに」と付けて心得べし」とある中の「うに」に通じるところのある形式であり、それとの史的連続性等、考慮する価値はあるかも知れない。

### 三・2 三代集

三代集についても【散る】「人・見る・知る」と共起する表現をチェックしたところ、次のような形式がピックアップされた。

#### 【散る】

#### 「ヌベシ」

⑩ 佐保山のははそのもみぢちりぬべみ夜さへ見よと照らす月  
かげ  
(古今和歌集 巻五秋下 二八二)

他に古今2例のうち「ヌベラナリ」1例、後撰4例のうち「ヌベラナリ」2例があるが<sup>(13)</sup>、「危惧」か「愛惜」程度か微妙なものも多い。ただ「ヌベシ」は源氏物語や万葉集でもピックアップされた形式であり注目が必要と思われる。

#### 「仮定バ＋惜シ」

⑪ 時雨ふりふりなば人に見せもあへず散りなばおしみ折れる  
秋萩  
(後撰和歌集 巻六秋中 二九七)

#### 【人・見る・知る】

#### 「ヌベシ」

⑫ …色にいでば 人しりぬべみ  
(古今和歌集 巻十九雑体 一〇〇二)

#### 「ヤーム」

・しのびつつ夜こそ来しか唐衣ひとや見むとは思はざりしを<sup>(14)</sup>  
(拾遺和歌集 巻十九雑恋 一二二五)  
ここでも複合助動詞系の「ヌベシ」と、疑問推量系の形式が、各

1例ながらピックアップされる。疑問推量系の「ヤーム」は源氏物語でもピックアップされたものであった。

### 四 おわりに

以上、あくまで今回とった方法での範囲内ではあるが、近藤明(二〇一三)で述べたことに加えて、次のようなことが言えるかと思う。

○複合助動詞系の形式、疑問推量系の形式、「仮定条件＋評価語」の形の評価的複合形式といった枠組は、源氏物語を中心とした中古和文と共通する。

○一方で、複合助動詞系表現の中では今回ピックアップされたものは「ヌベシ」のみであるといった、その枠組の中での相違も認められる。

○「仮定条件＋評価語」の中に位置づけられるかという課題はあるが、万葉集では「マク惜シ」も、新たな候補として挙げられた。

○万葉集の「マクニ」を「推量系助動詞＋助詞ニ」とでも一般化できるならば、新しい枠組が一つ加わることになる。

これらの整理を踏まえた上で、各論的分析に進むことが、今後の課題として急がれるところである。

### 注

(1) 「ばわろい」は現代語では耳慣れないが、矢島正浩(二〇一三)によれば、「ばわろい(わるい)」のような、「非許可」用法の評価的複合形式「仮定形／未然形＋バ」は、「アア酒にふたら忘れてひよつとい(言)やればわるい」(近松浄瑠璃 大経師普暦二七一五初演)のように近世中期に見られる由であり、これは『あゆひ抄』の時代ともほ

ば合致する。

- (2) 高山善行(一九九六)は、「カモシレナイ」は危惧—期待の対立についてはニュートラルだが、実際に使用される際には危惧に偏る可能性が高いかもしれないとしている。

- (3) ただしこの方法では、「モノ」「モコソ」と同質の危惧表現しかピックアップできないのではないかとといった問題はあはる。

- (4) 推量系の助動詞が単独で、もっぱら「危惧」の意を表したり「危惧」の意と著しく親近性を有したりするという事態は考えにくいとの見通しに基づくが、「推量の助動詞全体について、どの程度『危惧』の意味を表すものがあるか調査する必要がある」(高山善行一九九六)といった問題もある。

- (5) 2例以上としたのは、あまりに特異な状況や特殊な価値観に基づいた一般性に乏しいものが加わるのを避けることを意図していることである。

- (6) 山口堯二(一九九〇)は、疑問表現において「解消の見通しの立ちかねる」疑念の場合、「希望する事態実現のおぼつかなさから生じる主体の危惧の念が表面化しやすい」(p.四三)とする。なお山口はそれらを「不定方式」と「特定方式」に分けているが、本稿で「危惧表現」とするのは「特定方式」の方である。

- (7) この段階で一つの資料内としたのは、ある資料Aで「モノ」「モコソ」による被危惧事態を表していた語句を取り出し、(同時代のものとはいえ)別の資料Bにおいてその被危惧事態を表す語句と共に起する表現をピックアップする、といったことを行うのは、等質性の確保の点において不安があり、いきなりこのようなことを行うのは躊躇されたためである。

- (8) 国文学研究資料館の「大系本文(日本古典文学データベース)で中古の『物語』『日記・紀行』『随筆・随想』の範囲で横断検索を、ジャパンナレッジで新編日本古典文学全集の同様の範囲の検索を、ある程度行った程度である。

- (9) 訓点資料については、これといった見解を示し得る段階にないが、興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点をざっと見た限りでは、「師ノ容貌

ヲ観ルニ、彼ニ至リテハ恐ラクハ銷融シナム」(巻二〇九三、「経ノ本、散失セムコトヲ恐ツ」(巻七 二六〇)のように「オソル」ラクハナム」「コトヲオツ・オソル」といった形式の関与が目につく。

- (10) 木下正俊(一九八三)は、「万葉では『玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる』(2・一九六)などのように恒常的現在態を表わして用いられることはあっても、未来推量でなく、あやぶむ気持ちも認められない」とする。

- (11) 「マク惜シ」の形のものとしてはこれ以外に、「明けまく惜し」「荒れまく惜し」「(月)が入らまく惜し」「(露)が置かまく惜し」「刈らまく惜し」「枯れまく惜し」「(月)が過ぎ隠らまく惜し」「(紅葉が)過ぎまく惜し」「立ち別れまく惜し」「解かまく惜し」「別れまく惜し」が認められる。

- (12) 類例として「起き立たば 母知りぬべし(母可知) 出でて行かば 父知りぬべし(父可知)」(巻十三 三三二)。

- (13) 「ベラナリ」は、和歌では古今和歌集の頃を中心に男性歌人が多く使用するという、時代的・位相的な特徴を有する形とされる。

- (14) 詞書に「人の妻し侍りける男の、獄に侍て、乳母のもとにつかはしける」とあり、「人や見む」と「獄見む」の意味をかけている。

#### 参考文献

伊藤慎吾(一九七八)『源氏物語の助動詞完了態用例の新研究』(風間書房)  
奥村剛(一九八五)『源氏物語』における「もや」の用法について『日本語学』四・六

木下正俊(一九八三)『万葉集全注 巻第四』(有斐閣)

グループ・ジャマシイ(一九九八)『日本語文型辞典』(くろしお出版)

慶野正次(一九六四)「もや」について『解釈』一〇・五

小池清治(二〇〇二)「懸念・心配の表現2」『日本語表現・文型事典』

朝倉書店

小路一光(一九八〇)『万葉集助動詞の研究』(明治書院)

小路一光(一九八八)『万葉集助動詞の研究』(笠間書院)

- 小林千草(二〇〇二)『懸念・心配の表現1』(『日本語表現・文型事典』朝倉書店)
- 近藤明(一九九四)『危機の「カネナイ」の成立』(『北陸古典研究』九)
- 近藤明(二〇一三)『中古における危機表現をめぐって―「モノ」「モコソ」とその周辺―』(『国語語彙史の研究』三二 (和泉書院))
- 渋谷勝己(一九八八)『江戸語・東京語の当為表現―後部要素イケナイの成立を中心に―』(『大阪大学日本学報』七)
- 高梨信乃(二〇一〇)『評価のモダリティ』(くろしお出版)
- 高山善行(一九九六)『複合係助詞モノ、モコソの叙法性』(『語文』六五)
- 田中寛(二〇〇八)『条件と可能性、蓋然性のモダリティ―「かもしれない」「かねない」とその周辺』(『大東文化大学外国語学部創設35周年記念論文集』のち『複合辞からみた日本語文法の研究』二〇一〇 ひつじ書房)
- 永野賢(一九五三)『表現文法の問題―複合辞の認定について―』(『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂)
- 内藤聡子(一九九〇)『源氏物語』における「つべし」「ぬべし」(『愛知大学国文学』三〇)
- 日本語記述文法研究会(二〇〇三)『第3章 評価のモダリティ』(『現代日本語文法』第8部 モダリティ)くろしお出版)
- 松尾聰(一九八四)『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷』(笠間書院)
- 三浦和雄(一九六七)『「もこそ」の係り結びの型と意味との関係』(学燈社『国文学』一一二二)
- 三宅知宏(一九九二)『認識的モダリティにおける可能性表現について』(『待兼山論叢・日本学篇』二六)
- 宮島達夫(一九七〇)『語いの類似度』(『国語学』八二)
- 森山卓郎(二〇〇二)『可能性とその周辺―「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の迂言的表現と「かもしれない」―』(『日本語学』二二二二)
- 矢島正浩(二〇一三)『大阪・上方語における条件表現の史的展開』(笠間書院)
- 山口堯二(一九九〇)『日本語疑問表現通史』(明治書院)
- 山口堯二(二〇〇三)『助動詞史を探索』(和泉書院)
- 山本佐和子(二〇一三)『ツベイ』と『ツベシイ』(『日本語の研究』八一)
- 吉田金彦(一九七三)『上代語助動詞の史的研究』(明治書院)
- 資料
- 万葉集(旧日本古典文学全集) 三代集(新日本古典文学大系) 蜻蛉日記(旧日本古典文学大系) 源氏物語(源氏物語大成)
- 付記
- 本稿は科学研究費補助金(基盤研究C 課題番号25370513)による研究成果の一部である。